

2021年 ラウンド4 レース10 抜群のスタートを決めた古谷悠河選手が、独走で今季3勝目をマーク

Formula Regional Japanese Championship（フォーミュラ・リージョナル・ジャパニーズ・チャンピオンシップ=FRJ）2021のラウンド4、レース10決勝が、10月9日（土）にスポーツランドSUGOで行われ、28号車の古谷悠河選手（TOM'S YOUTH）が今季3勝目を飾りました。



朝の予選と同様に路面はウェットコンディションでしたが、雨が止んでいることもあり、3号車の小川颯太選手（Sutekina Racing）と5号車の塩津佑介（Sutekina Racing）がスリックタイヤを装着しましたが、残りの11台はレインタイヤを履いてグリッドにつきました。

スタートでは2番手の古谷選手が好ダッシュを決め、ポールスタートの77号車、澤龍之介選手（D'station Racing）を抜いてホールショットを奪取。その2台に続く、45号車の大草りき選手（PONOS Racing）、8号車の三浦愛選手（ARTA F111/3）、11号車の太田格之進選手（Rn-sportsF111/3）の合計5台がひとつの集団となり、激しいトップ争いが繰り広げられる展開になりました。

その中で、トップを死守した古谷選手は徐々にペースを上げていき、3周目以降はファステストラップを次々と塗り替えていくペースで、後続との差を徐々に広げていきました。2周回目に澤選手を追い抜いて2番手に浮上した大草選手もトップに追いつこうとペースをあげましたが、その差は広がるばかりで、9周回を終えた時点で両者の差は6.5秒となりました。

一方、スリックタイヤでスタートした小川選手と塩津選手は、思うように路面コンディションが回復せず、2台とも下位に沈む苦しいレース展開となりました。

マスタークラスでは、スタートでクラス首位に躍り出た4号車の今田信宏選手（JMS RACING with B-MAX）が順調に周回を重ねていきますが、レース後半に入ると96号車のTAKUMI選手（B-MAX ENGINEERING FRJ）が背後に迫り、15周目の1コーナーでインから今田選手を追い抜きにきました。しかし、直後の2コーナーで接触。今田選手はコースオフを喫し、その間にTAKUMI選手がクラストップに上がりました。その後コース復帰でペースが上がらない今田選手を7号車の畑享志選手（F111/3）がオーバーテイクし、クラス2番手に浮上しました。

このレース10は18周回、あるいは25分間のレースフォーマットだったため、18周回を迎える前に上限時間である25分に到達したため、17周回を終了したところでチェッカーフラッグが振られました。結局、最後までペースを緩めずに逃げ続けた古谷選手が、2番手に11.4秒の大差をつけ、今シーズン3勝目を上げました。2位には大草選手、3位には澤選手が続きました。

マスタークラスはTAKUMI選手がクラストップチェッカーを受けましたが、今田選手に対する接触行為が審議され、レース結果に10秒加算のペナルティが科され、これにより、畑選手がクラス優勝となり、今田選手が2位、30号車のDRAGON選手（B-MAX ENGINEERING FRJ）が3位という結果になりました。

・レース10優勝 古谷悠河選手コメント

「予選2では自分のミスでクルマを壊してしまったのですが、チームの皆が時間がない中で修復してくれて本当に感謝しています。グリッドへの試走の時にクルマの確認をしましたけど、全く問題なかったんで、自信を持って決勝にいけました。今までスタートが課題でしたが、今回はうまくいってトップに立つことができました。1周目はペースが上がらず苦しかったのですが、なんとか守りきることができて、2周目以降はペースを上げていくことができました。2レース目は後ろからのスタートになりますが、今回のようなペースがあれば追い上げていけると思うので、次も頑張ります」

・レース10 マスタークラス優勝 畑享志選手コメント

「スタートで失敗してしまい、周りのクルマに抜かれてしまって『まずいな』と思いました。最初はなかなか前に追いつけなかったのですが、途中から走行ラインを変えてみたら、一気に追いつけることができました。そうしたら前の2台に接触があり、そこで今田選手の真後ろについて馬の背コーナーでは『絶対に飛び込んでやる！』という気持ちで入っていき、追い抜くことができました。そのままTAKUMI選手も抜きたかったのですが、その前にチェッカーフラッグになりました。でも、勝つことができ良かったです」

以上